

彰していただきました。22年前に育成会会員となり、「同じ思い、同じ願い」をもつ皆様と共に歩んでいた結果での表彰だと、心から感謝申し上げます。これからも子供達の笑顔がいっぱい見られるように、地域・社会作りに努力していきたいと思えます。何卒よろしくお願い致します。

~~~~~  
**◆第2分科会 多様な働き方、働く場をつくる  
(労働・雇用)に参加して  
難波特別支援学校支部 長谷川 美智代**

基調講演は、特定非営利活動法人「ワークスマらい高知」代表 竹村利道氏から、「保護より機会を」という題でお話をお伺いしました。市社協を退職し、立ち上げた有限会社で食品工場を始めたが、半年も持たないうちに資金が底を突き、撤退を余儀なくされた。この貴重な失敗を糧に振り出しからスタートする。障がい者や福祉を謳い文句や言い訳にせず、一般の人をターゲットにすることで、品質やサービスに緊張感を保つ。現場のスタッフには福祉関係者を配置しない(福祉関係者は、優しいけど知識がある分利用者の可能性を摘んでしまう)等を強く意識し、障がい者にちゃんとした働き口と賃金を提供したいという理念の基、企業との連携も積極的に進め、成長を遂げていく。現在は、カフェやレストラン、総菜・うどん・スイーツ工場などを含む10事業所にて、就労継続A型の60名をはじめ、B型、就労移行支援を合わせると100名の方が働いているとのことでした。それぞれの店舗や工場で、利用者さんがいきいきと働いている様子や満員のお客さんでにぎわっているお店の様子をNHKのハートネットTVで放映されたDVDで見せて頂きました。工場では障がい者が製造に従事していますが、何台もの機械を購入し、できないところは全て機器に任せ、できる仕事を一生懸命にする環境を整えておられます。また、「ワークスマらい高知」は、福祉事業所としてではなく地域の人気店として有名だそうです。そこで働いていることを自慢できる利用者の皆さんは、しあわせだな…と思いました。

午後からは、3名の提言者がお話しをされました。

初めに厚生労働省の障害者雇用対策課長の山田氏が、障害者雇用の現状として、民間企業の実雇用率が1.65%で法定雇用率には届かないものの雇用者数は8年連続で過去最高、着実に進展していることと就労支援機関の取り組みと実績について説明され、課題としては、雇用率達成企業が全体の半数以下であること、支援学校や福祉施設から「雇用」への移行について拡大が必要であり、企業実習や就労支援機能の強化

等の意見を述べられました。

次に、「知的障害者の働く現場」と題し、レオパレス・スマイルの湯田氏が会社での雇用管理の実例を話されました。中でも、親亡き後でも生活できるよう、家族との連携をとるために“レオだより”を出して本人の会社の様子を伝えたり、業務日誌の欄に家族のコメントを書く欄を設けたりしていること。お金も大事だが、会社として本人の生活の部分をどれくらい考えてくれているかが大切だと述べられたのが印象的でした。

最後に、障害者就業・生活支援センターの山本氏が、高知の特性を活かした農業分野に働く場を広げられないかと考え、A君の実習を行った結果、課題として農家の障がい者に対する不安感や出来高制による賃金支払い、既存の制度では雇用は実現しにくいことを挙げられました。そして職場定着の点から、働くだけでなく遊ぶという余暇が欠かせない。自力では充てない人に向けての余暇支援がこれからの課題であると話されました。

障がい者の就労環境は前向きで、雇用の場も広がり支援体制も整ってきています。働きたい人が、1人でも多く企業就労のチャンスをつかめるよう、さらなる前進を期待したいと思います。

~~~~~  
**◆第3分科会 地域の「拠点」としての福祉施設
(施設・資源)に参加して
東成育成園支部 中島 由紀子**

コーディネーターを務められた『手をつなぐ』編集委員の又村あおい氏から、「知的障害のある人の『暮らし』や『住まい』が、入所施設中心の障害福祉サービスの考え方から、地域での暮らしを支えるサービスの考え方へ方向転換が図られてきた中で、入所施設の位置づけや『地域の拠点』としての役割が期待されている。法改正で注目していきたいのは『障害者の意思決定支援』が総合福祉法の中でも強調されている点で、GHとCHの一元化・小規模入所施設を含めた地域における居住の支援の在り方について早急に検討が必要」と説明いただきました。

基調講演として、高知県知的障害者育成会の藤澤功賀氏から、昭和37年入所施設『かがみの育成園』が開設された歴史、現在17事業所35事業を展開し地域生活への移行を進めていることについてお話がありました。「せっかく入所が叶ったのに」という親亡き後を心配する家族の考え方が、最後まで支援を続ける＝ライフステージを支えるサービス体系を構築することで、「親が生きている間にこの子達のために